高女五年生の教育學答案から

大塚喜一

問一、子供への「おはなし」について述べよ。

A　子

夜御蒲團に入ると必ず「母さん、おはなしして」と言つてねだる私でした。そうすると母さんはきまつて「母さんはちつともおはなしなんて知らないの」と言ふのでした。でも母さんにおはなしをしていたゞいた事をちやんと覺えてゐるのでした。「嘘よあのおはなしして頂載よ。知つてるぢやないの」と言つてはせがむと「同じおはなしでいゝの？」と言ひながら何時でも山姥のおはなしか桃太郎のおはなしをして下さいました。

同じおはなしを何回きいたか、然しやつぱりあきない私でした。

それから御父様に「おはなししして頂載」と言ふと、大抵は電車か汽車のおはなしで、「チン〳〵！はい動きます」と始められるのでした。

おはなしの世界。それは私にとつて一番樂しい世界でありました。母さんにおはなしして頂く時は母さんと私とで造られた世界にすつかり住んでゐました。それはやはらかい、暖い、安らかな世界でした。そしてその時一番母様にすつかり抱かれてゐると云ふ氣持で一ぱいでした。信頼の氣持で滿ちてゐました。母さんの頭にも私に對しておはなしをしてゐるといふだけではなく、母さんもやつぱり私と同じ世界に住んでゐられて、私と言ふものをすつかり抱いていられたのでせう。そして幾度きいてもあきなかつたと言ふのは同じおはなしの材料を通じてその度毎に新しい心の交りが生ずるからで、しかもその交渉そのものは親と

子との愛情を増してゆく樂しいものであつたからに違ひありません。お父さんに電車のおはなしをして頂く時は二人で電車に乘つてゐるつもりになつてゐました。おはなしがすむとお父樣のお膝にのつかつて體をゆすぶつては「チン〳〵動きまあす」とやりだすのでした。(これは想像的模倣に入る事でせう)その時お父樣はニコ〳〵笑ひながらお膝をゆすつて電車になつて下さいました。おはなしがすんでもやつぱりそこに「おはなしの世界」があつたのです。

* * *

子供にとつておはなしの面白いのはおはなしのすぢではないのです。おはなしする人と子供との心の交渉によつて生じた世界が面白くて樂しいのです。おはなしする人が愛を以ておはなしするならすつかりそれは子供にとけ込み流れ込むのです。勿論そんな氣持で話す人なら、おはなしの材料だつて惡いものを選びはしないでせう。色々すぢのこんだおはなしより簡單なおはなしの方がずつとよいのです。きれいな「こゝろもち」をはぐくんでゆくよい「おはなし」を正い言葉でまじめにすると云ふ事は非常に大切な事だと思ひます。

以上

評 良き親ありて良き子あり。

更に 來るべき日に 榮光あれ！

問二、 想像的模倣によつて開かれてゆく「子供の世界」の情景を表現せよ。

B 子

去る快く晴れた日曜日の午後、裏の方に散歩に行くと六七人の男の子供たちが一生懸命に「兵隊ごつこ」をしてゐるのだつた。彼等はみんな通學用のランドセルを背負つて竹の棒を腰にさしてゐる。背嚢と劍とである。一人は望遠鏡を持つてゐる。きつと斥候だらう。一人は赤と白の信號旗正しく信號兵だ。實に眞劍だ。彼等は自分が兵隊でない事は明かに分つてゐながらすつかり兵隊になり切つた氣持で遊んでゐるのだ。彼等は暫らく現實の世界を離れて彼等の作つた世界に於てみんな兵隊になつて眞劍に戰爭をやつてゐるのである。

實に新鮮な潑溂さが漲ぎつてゐる。

今月四年四ヶ月になる姪がある。たまに遊びに行くと

「まゝごとしましよか」と大人ぶつた口調で私を誘ふ。勿論喜んで早速お客樣になると、庭から取つて來た草と南天の樣な赤い實を一生懸命俎板の上で切つて小さな鍋に入れてコンロにかける。小さな手はまるでお母樣と同じ樣に器用に動く。「サア出來ましたよ」と奇麗にお盆にのせて持つて來る態度、すつかり一家の主婦になりきつた態度である。「これは〳〵御馳走樣」と頂く振りをする。「おいしふ御座いますか」と聞く。聲まで主婦の樣である。その眞劍な可愛いゝ顏を見てゐると本當に食べてやりたい樣な氣になる。「どうも御馳走樣」と返すと「あんた本當に食べたの？」と心配相に聞く。

彼女は明かに、これは食べられないものだといふ事は知つてゐるのである。決して食べてはいけない物を食べる樣な愚な錯誤はしてゐない。それでゐて、本當に御飯を食べる時以上に眞劍な切實な心持を以て「想像の天國」に遊んでゐるところに「子供の世界」の特質が鮮かに表現せられてゐる。

自分が小さかつた時、友達と一しよに一番よくして遊だのは「お嫁さんごつこ」だつた。日あたりのよい椽側に箱を竝べて家を作り、繪葉書の障子、一人で親になつたり子供になつたりして…實際、私たちだけの世界だつたんだもの！

自由自在の空想の生活をほしいまゝにした昔が懷しい

評　美しい「子供の世界」がよく表現されてゐます。

＊　＊　＊

目下高等女學校五年生の教育學にて、生徒と共に學びつつある教科書

福島政雄先生著　日本女子教育學（天阪精華房發行）は、その卷頭に於て次の如くに說き起してゐられる。

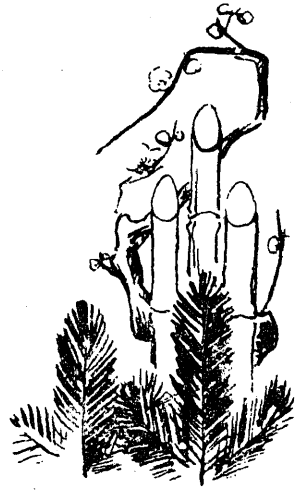
爪はめば子どもおもほゆ、栗はめばましてしぬばゆ、いづくより來りしものぞ、まなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ。

しろがねも　くがねも玉も　何せむに
まされる寶　子にしかめやも

この歌は萬葉集に出て居る有名な山上憶良の歌で、自然の人情としての親心を歌つたものである。この憶良が、旅

に病める人に代つて

出でて行きし日を數へつゝけふけふと
吾を待たすらむ父母等はも

と歌つたのは、自然の人情としての子心を詠じたものである。かやうな親心と子心とが深められて行つて一つに融けあふところに教育といふことが成り立つのである。苟くも教育といふ限りは、そのすがたかたちは如何にかはつても、必ず此の親心と子心との融和を以てその根本とするものである。

家庭教育の眞髓も保育の眞精神も、實に玆に歸すといふべきであつて、斯かる心情より教育を語つてこそ初めて人心に殊に處女の胸に感激を覺えしめ、教育に對する愛好心を目醒すことが出來ると思ふのである。自分は今、前に掲げた「おはなし」についての答案を見て、其筆者が彼女の家庭生活の中心をなす「親心と子心との融和」を通じて「おはなし」の眞趣を自然に味得してゐるのを見、之を私するに忍びず、兼ての問題たる「おはなしの基本的態度」を體得すべき淵源も亦實に玆に存する旨を實感して頂き度いと思つて、之を掲載することにしたのである。